

日本体育科教育学会 第 21 回大会（立命館大学）開催のご案内

（最終案内）

第 21 回大会実行委員会

日本体育科教育学会第 21 回大会を、立命館大学にて開催いたします。会員の皆様のご参加を、心よりお待ちしております。なお、大会の詳細、大会参加の申し込み、ラウンドテーブルの申し込み等につきましては、下記をご参照ください。

記

- **主 催** : 日本体育科教育学会
- **開催日時** : 平成 28 年 7 月 9 日（土）・10 日（日）
- **会 場** : 立命館大学大学（衣笠キャンパス）
〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1（以学館 3 階，4 階）
<http://www.ritsumeai.ac.jp/>
- **テーマ** : 「思考力・判断力・表現力」からみた体育授業研究の実践の成果
- **テーマ設定の趣旨**

過去 3 年間の体育科教育学会大会では、以下のテーマで課題研究シンポジウムが開催されてきた。

- ・第 17 回大会（広島大学）確かな学力の定着にむけた「指導と評価」の計画と具体
- ・第 18 回大会（国士館大学）学校体育における運動部活動と体罰を問う
- ・第 19 回大会（仙台大学）21 世紀型能力とこれからの学校体育

そして、昨年度の第 20 回大会（横浜国立大学）では、「現行学習指導要領の実施状況を問う」というテーマで、学会プロジェクトの報告が行われた。この報告では、現行の学習指導要領下における教師の意識や実践の事実に関する調査研究などが報告され、これからの時代に求められる学習指導要領の在り方について議論が交わされた。

他方で、次期の学習指導要領の改訂作業が本格的に始まり、昨年 8 月には、中教審の教育課程企画特別部会において「論点整理」がまとめられた。さらに、学校段階別・教科等別に専門的な議論を行っていくためにワーキンググループ等の設置が決定し、体育分野においても「体育・保健体育、健康、安全 WG」が設置され、次期の学習指導要領の改訂に向けた議論がスタートしている（文部科学省 HP より）。

上記の論点整理では、育成すべき資質・能力の要素について、「何を知っているか、何ができるか（個別の知識・技能）」、「知っていること・できることをどう使うか（思考力・判断力・表現力等）」、「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びに向かう力、人間性等）」が示されている。今後は、これらの 3 つの柱に沿って育成すべき資質・能力を整理し、学習指導要領の構造的な見直しを行うことが必要とされている。

このような教育改革の動向を受けて、学校現場では「思考力」の習得を中核に位置づけた授業づくりやアクティブ・ラーニングへの関心が高まりつつある。しかし、アクティブ・ラーニング等はいくまでも指導方法の 1 つであり、従来の指導方法を否定し、二者択一を迫るようなものではない（論点整理においても、特定の学習や指導の「型」に拘泥する事態を招きかねないことを危惧し、指導方法の不断の見直しが必要であることが指摘されている）。

また、これまでの体育科教育学領域における研究では、戦術学習モデルや協同学習モデルなど、「思考力」の習得を中核に位置づけた授業づくりやアクティブ・ラーニングと関連するような実践の成果が得られているのも事実である。

以上のことから、第21回大会の課題研究シンポジウムでは、次期の学習指導要領改訂の視点も踏まえながら、「思考力・判断力・表現力」の習得に向けた授業づくりについての議論を整理し、それらが無意図的に受け入れるのではなく、体育授業の本質を見失わないように、これからの体育の在り方について検討する課題研究シンポジウムを企画したいと考えた。

【第1日目 7月9日（土）】

■ 受付 以学館3階にて 12:00より

■ 課題研究シンポジウム 13:00-16:30

「思考力・判断力・表現力」からみた体育授業研究の実践の成果

■ 全体会（1）司会：吉永 武史（早稲田大学）・白旗 和也（日本体育大学）

13:00-13:05 シンポジウムの主旨説明

13:05-13:25 「思考力・判断力・表現力」とは 今関 豊一 先生（国立教育政策研究所）

13:25-13:45 小学校の実践事例を通して 大後戸 一樹 先生（広島大学）

13:45-14:05 中学校の実践事例を通して 木原 慎介 先生（東京国際大学）

14:05-14:25 高等学校の実践事例を通して 佐藤 若 先生（山形中央高等学校）

14:25-14:35 質疑応答

・休憩（移動を含む）14:35-14:50

■ 分散会 14:50-15:50

① 「思考力・判断力・表現力」からみた小学校体育科（ボール運動）の授業づくりについて

② 「思考力・判断力・表現力」からみた中学校保健体育科（体づくり運動）の授業づくりについて

③ 「思考力・判断力・表現力」からみた高等学校保健体育科（水泳）の授業づくりについて

・休憩（移動を含む）15:50-16:00

■ 全体会（2）

16:00-16:15 分散会報告（分散会司会者・各5分間程度）

16:15-16:35 質疑応答

16:35-16:40 総括

■ 情報交換会（以学館地下食堂） 17:30-19:30

【第2日目 7月10日（日）】

■ 9:00-11:30 ラウンドテーブル（立命館大学衣笠キャンパス 以学館教室）

* ラウンドテーブルでは、希望者が話題を提供し、参加者と双方向で議論します。

今回は11テーブル（すべて教室）用意します（詳細はHPを、テーマと提案者は同封の案内をご覧ください）。

申し込み関連

■ **大会参加費**：¥2,000-（学生¥1,000-）

* 学生の方は、学生証をご持参ください。また、非会員の方の参加も可能です。

■ **情報交換会**：¥4,000-（会場 立命館大学「以学館」地下食堂）

■ **大会参加申し込み締切り** 6月30日（木）（当日参加も可能です）

■ **申し込み方法**

* 以下の URL で「申し込みフォーム」を開き、必要事項をご入力の上、お申し込みください。

<https://ws.formzu.net/fgen/S74587238/>（PC、スマホから）



この URL は、日本体育科教育学会の HP にも掲載されます。

同フォームからの申し込みができない場合、大会参加、情報交流会の参加の有無を記入して、大会事務局まで FAX（075-466-3640）またはメール（jsppe21@gmail.com）してください。

参加申し込みされた方には、折り返し確認のメールを送信いたします。申し込み後、4日以上返信がない場合は、行き違い等の可能性もありますので、再度、確認のお知らせをいただければ幸いです。

* 資料印刷等の都合上、事前申し込みにご協力のほど、よろしくお願いいたします。

* 宿泊等の斡旋は行いませんので、みなさま各自での手配をお願いいたします。なお、インバウンドの影響もあり、京都での宿泊先を確保するのは難しくなりつつあります。できるだけ早めの確保をお願いします。

<日本体育科教育学会第21回大会実行委員会>

実行委員長：石田智巳（立命館大学） 事務局長：塩貝光生（立命館大学）

E-mail : jsppe21@gmail.com（日本体育科教育学会第21回大会）

TEL & FAX : 075-466-3640（石田研究室直通）

住所：〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1（以学館）

立命館大学 産業社会学部 石田 智巳

<会場までのアクセス>

※所要時間は交通状況により異なります

■ JR・近鉄京都駅から

市バス 50 にて 40 分、快速 205 にて 36 分、「立命館大学前（終点）」下車

JR バスにて 30 分, 「立命館大学前」下車

■JR 円町駅から

市バス 立命館大学ゆき 8 分, 「立命館大学前 (終点)」下車

JR バス 高尾・京北線にて 8 分, 「立命館大学前」下車

■阪急電車西院駅から

市バス 205 にて 13 分, 「衣笠校前」下車, 徒歩 10 分

■京阪電車三条駅から

市バス 12 にて 53 分, 市バス 15 にて 34 分, 市バス 51 にて 35 分, 「立命館大学前 (終点)」下車, 市バス 59 にて 40 分, 「立命館大学前」下車



バスで大学正門に来られた場合は、正門を入れて道なりに南に下って突き当たった建物が以学館です。

バスで衣笠校前下車の場合、またはタクシー利用の場合は、東門を入れてすぐ左 (南) が以学館です。



日本体育科教育学会第 21 回大会（立命館大学）

ラウンドテーブルのご案内（2016 年 6 月 6 日版）

①大学版単元構造図に基づく授業設計の試み

提案者

佐藤 豊（桐蔭横浜大学） 友添秀則（早稲田大学） 吉野聡（茨城大学） 本多壮太郎（福岡教育大学） 高橋修一（国立教育政策研究所） 大越正大（東海大学） 木原慎介（東京国際大学） 梶ちか子（鹿屋体育大学）

設定趣旨

単元構造図を活用した授業検討については、これまで本ラウンドテーブルにおいて、2009 年に「単元構造図詳細版」の提案、2013 年に、授業を構造的に理解するための「系統化ゲーム指導と評価の検討ー簡易版構造図の体育分野、保健分野の作成」についてのワークショップを通して意見交換を行った。

2016 年度は、新たな試みとして、大学体育連合等で開発公表を進めてきた大学授業用単元構造図の可能性について検討したい。初等中等教育では学習指導要領を根拠として、指導内容の抽出、学習過程の検討、評価規準の作成とタイミングという手順で検討を進めてきたが、高等教育では、各大学が設定するアドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アセスメント・ポリシー等に基づく単元構造図のアプローチを検討する。まず、2015 年度に鹿屋体育大学の保健体育科教育法、実技科目ダンスにおいて運用した単元構造図および評価シート等を手がかりとして、ワークショップを通してアウトカムを保証する授業設計について意見交換をしたい。

②校内研修として行われる体育授業研究の役割：中国と東南アジアの現状と課題

提案者

木原成一郎（広島大学） 大後戸一樹（広島大学） 齊藤一彦（広島大学） 久保研二（島根大学） 村井 潤（武庫川女子大学） 嘉数健悟（沖縄大学）

設定趣旨

日本の授業研究は、1990 年代以降、Lesson Studies として世界各国に広がり、算数・数学科や理科、社会科等の授業改善及び教師の成長の方法として普及している一方、校内研修としての体育の授業研究は十分に普及していない。

中国では教育部が、1999 年に「中小学教師継続教育規定」（以下「規定」と略す）を公布した。「規定」では、現職研修は教員の権利と義務であり、5 年間で最低 240

時間の研修が必要とされた。北京市海淀区では小学校体育教師の研修項目は学校外で受講する「共通内容」「専門内容」(100時間)と所属校で行う「選択科目」(40時間)の3つに分かれている。所属校で行う「選択科目」のなかには「授業見学と協議会」が位置づいている。今回は北京市教育委員会で体育教師の現職研修を担当している謝娟氏(海淀教師専修学校 体育研修室)をお招きし、中国北京市における校内研修としての体育授業研究の現状と課題を報告していただく。

シンガポール、タイ、インドネシア、ベトナム、マレーシアなどの東南アジア諸国でも、授業研究の導入が行われている。今回は、シンガポールの国立教育学院(NIE)で同国ならびにインドネシア、ベトナムなどで授業研究と学びの共同体に基づく学校改革(インドネシア、ベトナム)の普及を行ってきた齊藤英介氏(元NIE、現モナシユ大学<オーストラリア>)をお招きし、東南アジアにおける授業研究と学びの共同体に基づく学校改革の現状と課題を報告していただく。

中国とシンガポールの校内研修としての授業研究の現状と課題を学ぶことを通して、我々が求めるべき校内研修としての授業研究の役割について検討してみたい。大学教員の方はもちろん、校内研修としての体育授業研究に関心のある教師をはじめ、学生・院生、教育委員会の先生方にご参加いただき、積極的な議論をして頂ければ幸いである。

③小学校で学ぶべき武道の学習内容

—武道に共通する基礎的動きとは何か—

提案者

有山篤利(兵庫教育大学大学院) 藪根敏和(京都教育大学) 黒澤寛己(びわこ成蹊スポーツ大学) 藤野貴之(京都府立乙訓高等学校) 中嶋啓之(京都産業大学附属中等学校) 中村 聡(城陽市立北城陽中学校) 木村如宏(篠山市立古市小学校) 村崎謙志朗(加東市立社中学校) 竹内友季子(兵庫教育大学大学院)

設定趣旨

現在の体育は、小学校から高校までを4年ごとの発達段階で区分整理することにより、12年間の系統的な学習内容を保障している。しかしながら、柔道や剣道などの武道領域の学習については、中学校への系統性を意識した小学校の体育授業はほとんどみられない。多くの学習者は小学校段階で武道の基礎的動きを培われることなく、中学校でいきなり柔道や剣道などの種目を学ぶことになる。

このような状況に至る原因は、柔道や剣道が同じ武道領域に属しながら、運動学習としてそれぞれつながりのない独立した種目として捉えられていることにある。現在の武道領域は、剣道や柔道など種目の系統的な「技」を学ぶことが主な学習内容となっている。そのため、各種目はともに日本古来の武術・武芸を起源としながら、「技

能」の内容としては全く共通するものを明らかにしていない。必然的に、それぞれの種目に系統的に発展していくために必要な基礎的な動きが明らかにされることはなく、小学校の体育授業として成立しないのである。そこで、本ラウンドテーブルでは、柔道の「柔能く剛を制す動き」や剣道の「かけひきの動き」に着目しながら、「武道に共通する基礎的動き」を検討することにより、小学校で指導すべき武道の学習内容について議論を深めたい。

④高等学校の保健体育授業におけるアクティブ・ラーニングの取組

—生徒の課題発見を促すアプローチによる授業実践—

提案者

森 靖明（北海道札幌西高等学校） 堀川政彦（北海道北広島高等学校） 黒田 祥嗣（北海道北広島高等学校） 森田 有（北海道北広島高等学校） 佐藤亮平（北海道大学大学院教育学院） 小野地柊（北翔大学大学院） 近藤雄一郎（北海道大学大学院教育学研究科） 竹田唯史（北翔大学）

設定趣旨

現在、次期学習指導要領の改訂に向けた作業が進められており、2015年8月にまとめられた中教審の教育課程企画特別部会の論点整理においては、今後、育成すべき資質・能力が整理されるとともに、子どもたちの思考力・判断力・表現力等を育成する有効な方策の一つとして、課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学習・指導方法である「アクティブ・ラーニング」を重視する流れが示された。そこでは、特に高等学校において、義務教育までの成果を確実につなぎ、一人一人に育まれた力を更に発展・向上させることが求められている。

これまで、高等学校の保健体育科の授業においては、現行の学習指導要領が告示された際に示された「言語活動の充実」を図るとともに、生徒の思考力や判断力を高める実践は数多く行われてきたところであるが、我々は、今後は、生徒が自ら学習課題を発見してその解決に向けて取り組むとともに、さらに次の課題を発見して学習を深めていくような学習活動を展開するための指導方法の工夫・改善が必要であると考えた。

本報告では、共同研究者らが勤務する高等学校の「体育」と「保健」の授業において2014年から実施している、生徒自らが課題を発見・解決できるような発問や資料の提示方法等に注目し、習得した知識や技能を活用して他の生徒と協働しながら主体的に自らの考えを広げ深めていく学習活動を展開していくための指導方法の工夫・改善に取り組んできた内容について報告する。それらを通して、高等学校の保健体育の授業の課題やその在り方について議論を深めたい。

⑤体育授業における豊かな学びへの活動理論的アプローチ

提案者

加登本仁（滋賀大学） 森 敏生（武蔵野美術大学） 丸山真司（愛知県立大学）
中瀬古哲（神戸親和女子大学） 中西 匠（武庫川女子大学）

設定趣旨

次期学習指導要領の改訂では、「課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習（いわゆる「アクティブ・ラーニング」）や、そのための指導の方法等を充実させていく必要がある」（文部科学大臣による中央教育審議会への諮問、2014年11月20日）とされ、昨今、体育においても改めて子どもたちの協働的な学びを生み出す授業デザインや学習評価のあり方が議論されている。[br] 提案者らは、これまでも「体育の学習集団づくり」や「異質協働のグループ学習」として、子どもたちの主体的・協働的な学習をデザインする授業理論を検討してきた。それらは、目標の合意形成や異質集団における「でき具合」の観察・分析という学習活動を通して、技術的・戦術的な認識を媒介としてすべての子どもの「できる」「わかる」を保障しようとするだけでなく、子どもたちの「ものの見方・考え方」（能力観や集団観）を揺さぶり、集団で学ぶ方法やその意味・価値を学びとらせようとするものである。しかし、子どもたちの「ものの見方・考え方」の変化を含む「集団の質的高まり」を分析するためには、教科内容の習得（陶冶的側面）と集団の質的发展（訓育的側面）を相互関連的に把握するための概念装置が必要である。

L. S. ヴィゴツキーを源流とする活動理論（Activity Theory）は、「媒介」のアイデアを生み出した「第一世代」、個人的「行為」と集団的「活動」を明確に区分したレオンチェフの貢献によって「媒介された行為」のモデルを「主体」「道具」「対象」「ルール」「共同体」「分業」の6つの構成要素からなる「集団的活動システム」のモデルへと拡張した「第二世代」、そして「活動システム」の変化と発展の原動力として「内的矛盾」というアイデアを概念化し、2つ以上の「活動システム」の相互作用に着目した「第三世代」へと発展を続けている（エンゲストローム、1999）。このように、個人の対象的活動と共同体との複合的な相互関係を分かちがたい分析単位とみなす活動理論のアイデアは、子どもたちの主体的・協働的な学習過程の分析やデザインを可能にする概念装置としての可能性を秘めていると考えられる。

本ラウンドテーブルでは、活動理論、とりわけエンゲストロームの活動システム論や拡張的学習論の日本における先駆者である山住勝広氏（関西大学文学部教授）をお招きし、「教育実践研究への活動理論的アプローチの可能性」について報告していただく。その後、提案者から活動理論を分析枠組みとした体育授業研究の事例を2題報

告する。それらの報告を受けて、体育授業研究における活動理論の可能性について参加者とともに議論していきたい。

⑥アクティブラーニングの本質をグループ学習の視座から問う
～価値ある学びには、なぜ他者が必要なのか～

提案者

久保賢太郎（東京学芸大学附属世田谷小学校） 大貫耕一（和光大学） 鈴木 聡
（東京学芸大学）

設定趣旨

学校教育におけるアクティブラーニングの必要性・重要性が求められて久しい。しかしながら、実際の学びの事実やその中身については依然として判然としないのが現状であろう。

そこで、学びを深める上で必要となる他者の存在に着目した。子どもたちが切実感をもって学ぶとき、否が応でもともに学ぶ他者を必要とする場面が見られる。そして、その他者の存在によって成果を感じた瞬間、学習集団としての質や凝集性は高まりを見せ、さらなる高まりを求めていく。

その瞬間にこそ、主体的・協同的・探究的な子どもたちの学びが実現されている。まさに真のアクティブラーニングである。

第1に、子どもたちが運動技術について「わかり」「できる」ようになるための学習集団における教師と子どもたちの技術認識形成過程を明らかにする。第2に、技術認識における協同的な深い学びを実現する過程を紐解いていく。

そして、このような技術認識が他者と共にあることを、子どもたちの認識や技術獲得（技能）の事実と学習集団の質的深まりの連続性において、子どもたちの学習感想文などをよりどころとしながら、量的・質的に分析・考察した結果を報告する。

このような事例的研究から、子どもたちの学びの事実を視座にして、アクティブラーニングの本質に迫っていきたい。

⑦体育授業における思考力・判断力・表現力とその育成に関する議論
-協同学習、スポーツ教育、ダンス教育の立場から-

提案者

和田博史（日本体育大学） 栗田昇平（福岡大学） 大西祐司（びわこ成蹊スポーツ大学）

設定趣旨

現在、学校教育では思考力の習得が学力の重要な要素として注目されている。この第21回大会においても、「思考力・判断力・表現力からみた体育授業研究の実践の成果」を課題研究シンポジウム企画にしている。この課題研究に応じて、体育授業づくりを検討することは必要不可欠である。しかし、一方で学校体育の存在意義を示す体育独自の教育活動という視点からスポーツやダンスの魅力や価値を学ぶことも欠くことのできない重要な要素である。そこで、体育授業における協同学習モデルやスポーツ教育モデルやダンス教育の立場から、思考力・判断力・表現力の習得と体育独自の学習という双方の在り方に関して話題提供する。また、これまで蓄積されてきた指導モデルの成果と課題に基づいて、思考力・判断力・表現力とその育成について議論することによって、今後のそれぞれの指導モデルの普及と発展を目指す。

⑧教職課程の必修体育のあり方を再考する

提案者

日野克博（愛媛大学） 小林勝法（文教大学） 李子耕一（中京大学）

設定趣旨

平成27年12月27日に、中央教育審議会から「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」が答申されました。そのなかでは、教員養成に関する改革の具体的な方向性が示されており、「教員となる際に最低限必要な基礎的・基本的な学修」「教職課程の質の保証・向上」等が指摘されています。教員免許状の取得にあたって「体育（2単位）」は、全ての学校種、教科の免許状の取得において必要な必修科目として位置づけられています。日本体育学会の指導者育成・資格特別委員会・教職体育WGでは、教員養成部会の議論に注視しながら、教職課程の必修体育の課題や今後のあり方について検討してきました。本ラウンドテーブルでは、教職体育WGや大体連の調査結果の報告並びに実践事例の紹介を参考に、今後の教職課程の必修体育のあり方について、参加者の方々と議論を深めたいと思っています。

⑨小学校の器械運動の授業に浸透しない運動学理論

提案者

安達光樹（東京都稲城市立稲城第二小学校） 鈴木秀人（東京学芸大学）

設定趣旨

運動学の理論は、小学校の器械運動の授業にもっと取り入れられ、その知見が役立てられるべきなのに、実際にはそうはなっていない。提案者は、運動学の知見を自身の指導に生かすことにより、これまで多くの子どもたちのつまづきを改善することができたと考え

ている。しかしながら、小学校教員のほとんどは運動学の存在を知らず、器械運動の指導方法をマニュアル的方法に頼っているケースが多い。そこで、運動学の理論が小学校の教育現場に浸透していかない理由と今後の展望について、小学校教員の立場から問題提起をしたい。

⑩ダンス経験の少ない教員にも指導可能な「現代的なリズムのダンス」の授業展開方法について 第2報 ～足じゃんけんを手掛かりに～

提案者

増山尚美（北翔大学） 長谷川由樹（北翔大学、北海道ダンス推進委員会）

設定趣旨

ダンス経験の少ない教員でも、既存のステップの習得や振付の模倣に終わらず、交流を通して生徒が相互に学び合う「現代的なリズムのダンス」の授業展開が可能となる方法について昨年度に続いて事例を報告する。この授業展開方法の特徴は、教師が一方的に伝達するのではなく、生徒同士が見せる－まねる（フォロー・ザ・リーダー）、見せる－答える（バトル）というように表現と受容を繰り返し、ゲーム的に多くの人と交流することで動きの経験を重ね、相互に変化のさせ方の選択肢を増やして自分の動きを広げていくことにある。

今回は、足じゃんけんといった誰でもすぐにできる「簡単な動き」を素材としてヒップホップのリズムで展開する方法を取り上げ、工夫の仕方と、指導者が授業を構成する上で必要なことを検討したい。

⑪「スポーツ」とは何か？－学校体育の今後を展望するために－

提案者

宮坂雄悟（尚美学園大学） 原 祐一（岡山大学） 松本大輔（西九州大学） 木村翔太（東京学芸大学附属世田谷小学校） 佐藤貴浩（群馬県立前橋清陵高等学校）

設定趣旨

学校体育の目標として「生涯スポーツ」という理念が掲げられるようになり、すでに40年近くが経過しようとしている。そこで本ラウンドテーブルでは、あらためて「生涯スポーツ」と体育授業という実践の関係を考えてみたい。体育の学習の中核となる「スポーツ」に焦点を当て、「スポーツ」、「スポーツをする」、とはどのようなことなのかを、日々の体育指導の実践から、また理論的に問題提起し学校体育の今後の方向性を検討する契機としてみたい。

実施の方法としては、まず提案者4名より、「子どもにとってスポーツを学ぶとは？（小学校教員の立場から）」、「様々な背景を持った生徒たちにとってのスポー

ツとは？（定時制高校教員の立場から）」、「スポーツの意味とは？（社会構成主義から）」、「人はなぜスポーツをしてしまうのか？（人間学から）」といった観点からこれからの社会において求められる「スポーツ」観を提示する。その後は質疑応答、グループワークを通して、参加して下さる皆様にもスポーツ観を語っていただき、共に議論していきたいと考えている。

<会場校からのお願い>

1. 本学会への参加申し込みは、配布物や情報交換会の用意の都合がありますので、事前申し込みにご協力をお願いいたします。
2. 会場校である立命館大学は、学会などのイベントで学外の方が利用できる駐車場はありません。そのため、公共交通機関でお越してください。もしお車での来校が必要な場合は、近所の有料の駐車場を探して止めるようにしてください。
3. 大学の敷地内は全面禁煙となっております。また、京都市では路上での喫煙も条例により禁止されております。ご理解のほどよろしく申し上げます。
4. クロークは、第1日目（7月9日）は、以学館3階35号教室に設けますのでご利用ください。なお、第2日目（7月10日）につきましては特に用意をいたしませんので、各自で荷物の管理をお願いいたします。
5. 各教育委員会並びに民間教育研究団体等の主催する大会や研修会、あるいは小中高等学校の公開研究会等の案内については、本学会の公正性、並びに参加者への情報提供の視点を鑑みて、個人の責任で配布をお願いいたします。その際、次の4点に留意してください。
 - ①大会実行委員会としては配布に対して、一切、関知いたしません。
 - ②受付や出入り口は混み合いますので、その周辺での配布はご遠慮願います。
 - ③残部は配布者が必ず持ち帰ってください。
 - ④この措置は、今大会に適用されるものであり、次回の会場校の方針には影響を及ぼしません。
6. 出版社や教具関係の企業等につきましては、事前に申し込みをしていただき、指定された場所のみによる販売をお願いいたします。また、各個人による書籍等の販売は、すべて個人の責任で行ってください。なお、この措置は今大会に適用されるものであり、次回の会場校の方針には影響を及ぼしません。
7. 大学のアクセスについては事前にご確認をお願いいたします。京都駅からお越しの場合は、市バスよりもJRバスの方が早く着きます（その場合、「千本三条朱雀立命館」という停留所がありますが、そこで降りないようにしてください）。